



漫画

ろび～な

原作 TYPE-MOON / マーベラス

Kadokawa Comics A

F a t e / E X T R A







何だ

また警告に
来たのか



命として制約有りで翻玩した身
分を弁えるのは心掛である

歴代戦争の神話まで
そこで読んでいるがよい



あんなに
あんなに
あんなに



すまぬ 奏者

あのせいで
この決断的な大軍の時に
彼等が居るやもしれぬ



ああ

誰かへんげしてる……

セイバーがそばにいる……？

会いたい

……アハハ



思いのほか
近かった

……
……

セイバー……俺さめくらしい
……

……
昨日あれほど
力を消耗したのだ
……

まだ横になって
いた方がよい

でも……決断まで
時間ないよ

少しでも
体を動かさないと

……



意外な
訪問者だった



奇構えないで下さい
今回はガウエインを
連れていません



あなたと
話をしに来たのです



兄さんと
戦ったそうですね

まさか電話機すら
壊り壊えていたとは
僕も予想外でした

ですが

あなたに感謝を
表現してもらえたのは
兄にとってもよかったと
思います

ありがとう
ございました

兄は僕と違って、
自分自身で決断して
行動するタイプで、
兄の行動は僕にとって
大きな影響を与えて
くれた

兄は僕と違って、
自分自身で決断して
行動するタイプで、
兄の行動は僕にとって
大きな影響を与えて
くれた

岸波さん

……ああ……

兄の件で
悪い知りました

僕はまだ
王として
完全では
ないようだ

兄を看取った
あなたからなら
何かを学べるかも
しれません

あなたは
僕に欠けているものを

持っている

僕は……

そこまでです

レオ
もういいでしょう

対決を前にして
相手と語り合う必要が
あなたにあるとは思えない

出てくるなと
言っただけでしょう
ガウエイン







突然……
やはり
余が引へんせむは



ふむ

ガウエイン
のことか？



サイバー
アレイをどう見る？



騎士王アーサーに仕えたという
円卓の騎士・ガウエインの騎
しかをいだろう

聖剣の所持も加えて
叔の真名――



暴徒なまでに
忠実な犬よな

主に心酔して
真実も見えぬようだ

聞かぬ必要はない
というところだ

悔しいが
騎士の力は
間違いない
奴がまだろくな

ああ
ガウェインの戦闘は
燃焼を目にしているけど
炎光が遠いすぎて
勝負にならなかった

刃を抜く前だ
と聞いては
力強いが
めげな顔……

着いた

7回戦
アリーナの
最終戦

すごいな……







俺はセイバーのこと
好きだし
セイバーにも
聞きたい

だから
話してくれ

っあ!?



そんなに
聞かないかな



おおのれ
よくもそんな
余でもはばかるような
言葉を...

ええい

ちねにいても
大好きだっつー

そなたは予犬か!?
それとも羊の皮を
かぶった狼とやらか!?

セーバーが
黒いツボが
わびてきた



地上の無様戦争はどうか知らぬが
モサフにおける苦闘は
ちと劇的がつくのだ

そのひとつが
優先度の問題だ

モサフ内に潜伏した
サーヴァントは
最終的にマスターより
ムーンセルを
守らねばならぬ

……だが
今の余は

そなたに誤いを告げてから
目に目を覚ましさが
増しているのだ

たっ



僕にそなたが
ムーンセルと戦った時
命は懸けなく
そなたにつくだろう

それは契約違反だ
ムーンセルは
そんなサーヴァントを
許しはしない

……いや
そんなサーヴァントの
マスタリーを
真つ先に
潰滅させるだろう



僕にムーンセルから
2度の警告が
来ている

それは……

自分が情けなくて
言い出せなかった
すまぬ……



熱戦がどのように
下るのか
わからないが

決戦戦の進行に
障害が起るものは
間違いない

余は
サーヴァント
失格だ



……なんだ



そんなことで
悩んでいたのか



そんなことは
なんだ！
大事だぞ……

そっか

……それなら僕も
マスター失格だ

ムーンセルなんて
知ったことじゃない





飯に聖杯とセイバー
どちらが大切かと
問われたら

俺は迷わず
セイバーを選ぶ

セイバーはデータでしか存在しない物を
"それでよし"と認めてくれた

セイバーとの絆は
何もなかった俺が手に入れた
かけがえのない物だ

何があっても手放すものか

それに

俺が知っていてもセイバーは
誰かをかけるから
手を引くなんて

殊勝なことは
言わない

セイバー
らしくない

///

はははは

そなたは
時に心に響くことを
言う……

うむ

そうであった

余は聖帝ネロなるぞ

余は余として
振る舞えぬなら
価値がない

欲しいものは
欲しいのだ



余の想いを
止められるものか

……んー
……んー
……んー

それにしても
ムーンをんがりの
顔さ

いつたい何だ
初めとんだろ
警戒しなさいと

……
して

勇者よ

さっきの
余の顔を撫でる所作

悪くない

もう一度
試してもよい……



何だい



航性ア、ロダラム



アレは
「セウツ」の魁武かい



gain_Str

CODE:CAST





飛び道具に
頼りすぎた

9%

仕留めた

勇者
やっぴ



あいつは
オアゴッ

いざいざいざいざ
なごめなごめ

そ
勇者！



うん！



セイバー!!

このままでは
二人とも倒れてしまう

嫌だ

こんな形で

セイバーと
別れたくない

こんな形で
聖杯戦争を
終わらせていいのか!?

ムーンセル!!









アオ

ガウエイン

宝具の関根を
許しましょう





敵軍
エクスカリバー！
ガラディーン

ガラディーンを
円卓の騎士
たらしめる部隊

あの貴族
にだけは
勝てない



エクスカリバー！
ガラティーン！

— 2000年10月 —



あれだけの敵を
倒さねばという
覚悟
あんなに
勇ましい
少女は
初めて
見た

ガラッ
ガラッ

我が世の覇者
の如き者に
対する





コッ

前敵は
それだけじゃない

あれだけの攻撃を
身に受けながらも

タウエインには
痛ひとつ
ついてなかったんだ

あれは
宝具の
力なのか？

……

ちよっと……
通うと思う

たぶんそれは
ガウインの持つ
宝具の力

「午前中は三番の力
ってやつは」

宝具の力！

宝具の力……
それは……

……
……
……

……
……
……

……
……
……

……
……
……

対峙する
術はないのか……



あも

いん...



偶然通りなら——

その交流は
一度離れられど
二度とは
作用しない点と異に



どんな苦痛にも
耐えるはあも

ガウエルンだつて
例外じゃないわ

それだけ能力を
失ふんであもなを
保護の陣りからは
抜け出せない

強力なスキルほど
応用範囲をいからぬ



ガウエルンの弱点は
落陽……つまり



落陽は落ちたその瞬間に
瞬間的な高速度で落ちていく
その瞬間にその一瞬の間だけ
その力を発揮するが、その瞬間に

おい

お日様を
落とせばいいのよ

この世界に
太陽なんて
ないんだけどね

代わりの物を
落とす――

そんな事が
可能なのか？

「私に恋えがあるの」

まかせて

本気で
恋慕には
勝てない
あなたに
恋をした

そういうとば
白野郎に
見えないもの
があるの

こっちは
来ず

こんなところ
何があるんだ？

隠家

西須中に
見ついたらだめとね

はら
見て



これは……

地上……



そう
今運使の地上の姿

セラアが
観測している
映像みたいね

偶然この距離から
映像が観れるのを
見つけたの



そういえば
まだちゃんと話して
なかったわね

私が
世界戦争に参戦した理由

今
地上が
どうなっているのか

01 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由

02 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由

03 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由



04 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由

05 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由

06 世界は
どうなっているのか
世界戦争に参戦した理由



我が世の無常を
悟るは金に

大人はともかく子供は可が
せんとて笑わなく
なつてゐることに

今のこの世界は
どうも
悪くない

流たり流よぬ

この世、どんなに
時間が経つても
何と代わり映えはしない

流やにくすんでいつて
最後には
無常になるだけ

そんな世界で
笑ふるとしたら
それこそ
正気じゃないし

だから私は
ハイウェイと戦つた



1. 2017年12月31日，甲公司“应付账款”科目所属各明细科目期末贷方余额如下表所示：

1. **Introduction**
 2. **Methodology**
 3. **Results**
 4. **Discussion**
 5. **Conclusion**
 6. **References**
 7. **Appendix**
 8. **Index**
 9. **Table of Contents**
 10. **Figure 1**
 11. **Figure 2**
 12. **Figure 3**
 13. **Figure 4**
 14. **Figure 5**
 15. **Figure 6**
 16. **Figure 7**
 17. **Figure 8**
 18. **Figure 9**
 19. **Figure 10**
 20. **Figure 11**
 21. **Figure 12**
 22. **Figure 13**
 23. **Figure 14**
 24. **Figure 15**
 25. **Figure 16**
 26. **Figure 17**
 27. **Figure 18**
 28. **Figure 19**
 29. **Figure 20**
 30. **Figure 21**
 31. **Figure 22**
 32. **Figure 23**
 33. **Figure 24**
 34. **Figure 25**
 35. **Figure 26**
 36. **Figure 27**
 37. **Figure 28**
 38. **Figure 29**
 39. **Figure 30**
 40. **Figure 31**
 41. **Figure 32**
 42. **Figure 33**
 43. **Figure 34**
 44. **Figure 35**
 45. **Figure 36**
 46. **Figure 37**
 47. **Figure 38**
 48. **Figure 39**
 49. **Figure 40**
 50. **Figure 41**
 51. **Figure 42**
 52. **Figure 43**
 53. **Figure 44**
 54. **Figure 45**
 55. **Figure 46**
 56. **Figure 47**
 57. **Figure 48**
 58. **Figure 49**
 59. **Figure 50**
 60. **Figure 51**
 61. **Figure 52**
 62. **Figure 53**
 63. **Figure 54**
 64. **Figure 55**
 65. **Figure 56**
 66. **Figure 57**
 67. **Figure 58**
 68. **Figure 59**
 69. **Figure 60**
 70. **Figure 61**
 71. **Figure 62**
 72. **Figure 63**
 73. **Figure 64**
 74. **Figure 65**
 75. **Figure 66**
 76. **Figure 67**
 77. **Figure 68**
 78. **Figure 69**
 79. **Figure 70**
 80. **Figure 71**
 81. **Figure 72**
 82. **Figure 73**
 83. **Figure 74**
 84. **Figure 75**
 85. **Figure 76**
 86. **Figure 77**
 87. **Figure 78**
 88. **Figure 79**
 89. **Figure 80**
 90. **Figure 81**
 91. **Figure 82**
 92. **Figure 83**
 93. **Figure 84**
 94. **Figure 85**
 95. **Figure 86**
 96. **Figure 87**
 97. **Figure 88**
 98. **Figure 89**
 99. **Figure 90**
 100. **Figure 91**
 101. **Figure 92**
 102. **Figure 93**
 103. **Figure 94**
 104. **Figure 95**
 105. **Figure 96**
 106. **Figure 97**
 107. **Figure 98**
 108. **Figure 99**
 109. **Figure 100**
 110. **Figure 101**
 111. **Figure 102**
 112. **Figure 103**
 113. **Figure 104**
 114. **Figure 105**
 115. **Figure 106**
 116. **Figure 107**
 117. **Figure 108**
 118. **Figure 109**
 119. **Figure 110**
 120. **Figure 111**
 121. **Figure 112**
 122. **Figure 113**
 123. **Figure 114**
 124. **Figure 115**
 125. **Figure 116**
 126. **Figure 117**
 127. **Figure 118**
 128. **Figure 119**
 129. **Figure 120**
 130. **Figure 121**
 131. **Figure 122**
 132. **Figure 123**
 133. **Figure 124**
 134. **Figure 125**
 135. **Figure 126**
 136. **Figure 127**
 137. **Figure 128**
 138. **Figure 129**
 139. **Figure 130**
 140. **Figure 131**
 141. **Figure 132**
 142. **Figure 133**
 143. **Figure 134**
 144. **Figure 135**
 145. **Figure 136**
 146. **Figure 137**
 147. **Figure 138**
 148. **Figure 139**
 149. **Figure 140**
 150. **Figure 141**
 151. **Figure 142**
 152. **Figure 143**
 153. **Figure 144**
 154. **Figure 145**
 155. **Figure 146**
 156. **Figure 147**
 157. **Figure 148**
 158. **Figure 149**
 159. **Figure 150**
 160. **Figure 151**
 161. **Figure 152**
 162. **Figure 153**
 163. **Figure 154**
 164. **Figure 155**
 165. **Figure 156**
 166. **Figure 157**
 167. **Figure 158**
 168. **Figure 159**
 169. **Figure 160**
 170. **Figure 161**
 171. **Figure 162**
 172. **Figure 163**
 173. **Figure 164**
 174. **Figure 165**
 175. **Figure 166**
 176. **Figure 167**
 177. **Figure 168**
 178. **Figure 169**
 179. **Figure 170**
 180. **Figure 171**
 181. **Figure 172**
 182. **Figure 173**
 183. **Figure 174**
 184. **Figure 175**
 185. **Figure 176**
 186. **Figure 177**
 187. **Figure 178**
 188. **Figure 179**
 189. **Figure 180**
 190. **Figure 181**
 191. **Figure 182**
 192. **Figure 183**
 193. **Figure 184**
 194. **Figure 185**
 195. **Figure 186**
 196. **Figure 187**
 197. **Figure 188**
 198. **Figure 189**
 199. **Figure 190**
 200. **Figure 191**
 201. **Figure 192**
 202. **Figure 193**
 203. **Figure 194**
 204. **Figure 195**
 205. **Figure 196**
 206. **Figure 197**
 207. **Figure 198**
 208. **Figure 199**
 209. **Figure 200**
 210. **Figure 201**
 211. **Figure 202**
 212. **Figure 203**
 213. **Figure 204**
 214. **Figure 205**
 215. **Figure 206**
 216. **Figure 207**
 217. **Figure 208**

THE UNIVERSITY OF CHICAGO



1. 在 1990 年 12 月 31 日以前，
 2. 在 1990 年 12 月 31 日以前，
 3. 在 1990 年 12 月 31 日以前，
 4. 在 1990 年 12 月 31 日以前，

「おれは、さういふことをしなかつた。さういふことは、おれに出来ぬ。」

● 2013 年 12 月 1 日起
● 2014 年 1 月 1 日起
● 2014 年 2 月 1 日起

牙……

悪戯の……

それが私が
ここにいます理由

……

……あ、理解して
もらっても困るけど
私の願いを
宿所に頼んでくあやで
そんな話じゃないからな

宿所に頼むのは
悪者の権利

悪化した私が
口を封じていい
ものじゃない

ただ……
あなたには

私の気持ちをも
知ってもらいたいと
思ったの

……そういう人間が
いるんだって

安定よりも
変乱を望んだ
肉こぶ見せず
無情な人間も
いるんだって

また

無
ひつなご……

あは

隠したかったのは
それだけ

この人ね
表裏に付き合わせ
ちゃって

あの世間の
話とんだが
真実だてあつた理由

連続的なのは
ごん様あつて
皆人に悪い事
思ひあつた
事はしないはず

守るべき所に
閉めこめられ
閉りかた文にこた

遠坂 まさか



ここから
脱出する方法が
まだ見つからない
のか？

聖杯戦争の
結末

それは
この世の
リセットの
スイッチになる

正統のマスターでも
NPCでもない運命は

リセットで
過去と未来が
消えてしまう

遠坂

聖杯はどんな願いも
叶えてくれるんだよな……

なら俺は……

自野君……
ダメ

こんなことのために
命を懸けるとしたら……
私は絶対に
許さない



白野君は
決断しな
いままに
死んで



夢だよ
涙のことが
気がかりやう

だが
今は涙を留めて

そなたは
自分ができることを
すれば良い



勝つぞ

余と

運のためにも

そして――

聖杯戦争の最後の決闘が始まった

ようやくきたる
少年
片眼明すが
手で待っている

闘技場へと通じる
最後の扉を開こう

最も弱きものが
最も強きものに挑む

迷いと嘆き
決断と成長に満ちた
その道程こそ
人間証である

聖杯は強きものにのみ与えられる
最後の二人は
ともに性質の違う強者となった

であれば――

もう一度君に贈ろう
光あれと

ミカヲ



——熾天の玉座にて君を待つ

phantasm31

七天の聖杯





……発端は前世紀に
さかのぼります

ある時 人類は
巨大な構造物を
観測 発見しました

遙か過去から
存在していた
人類外の
テクノロジーによる
古代遺物を……

それが聖料——
ムーンセルです

しかし 世界の人類には
その正確な構造・用途がわからず
解明することは
できませんでした

——いえ 現在でも
分らないは
常識にわいてすら
解明することは
できないでしょう

それと
ムーンセルを
模倣する技術は
開発されたのです

ですが我々は その知識を
何をしてるのか
だけは知るところでなければなら

……ムーンセルは
地球を見ていたのです



聞きひとつせすに
そして魂を消去せし
地球のすべてを
記録し続けてきた



ムーンセルは
地球の記録を
七つの神々の
魂に託した

ムーンセルは

ムーンセルとは
地球の記録にして神々
七つの神々の魂に託した



ムーンセルは
地球の記録を
七つの神々の
魂に託した

物理的ありかがわかった時
人々はこぞって
そこへ到達しようとしていた

しかし我々西歐財団は
それを差し止めた……

それはどの物が
ハイウェイ以外の
人間に渡ると
無用の喧嘩を呼ぶと
考えたからです

ハイウェイは
新しい技術開発を奨励した
それは人間にはこれ以上の
テクノロジーは必要ない
という判断からです

同時に
物理的に燃料に
至る手段を
封じることでもした

封じ事……

ええ

率直に言えば
「平田開発」ですよ

さうして上野や東京千原の
近郊を走る高速道路
月が燃料そのものを運ぶ
という事です

我々西歐財団は
燃料を燃やした時点で
個人が仕えるのを許さず
国家に委ねることに
決めました
国家運営を封鎖しました

しかし
抜け道があった

それが雲子ハツカーによる
侵入です

そもそも

人間はずっと昔から
ミーンセルとのシタクトを
取っていた

霊体意識として
その内部に
隠れていたそうです

おそらくは……
ミーンセルにとって
人の精神だけは
観測できないもの
だからでしょう

あらゆる自然現象を
観測できる聖杯も
形而上のものは
観測できない

だから逆に組み入れて
使えてもらうことを
ミーンセルは望んだのだと
僕は思っています

聖杯戦争は
聖杯によって
都合の良い
儀式だったと
いうわけです



それでももうすぐ
手に届きます

……あなたを倒して

レオ

聖杯は
ハイウェイの手に
渡さない

僕はその聖杯によって
再誕された人間だ

アイタだけの
存在しかない僕が
地上に干渉するなんて
おこがましいこと
かもしれない

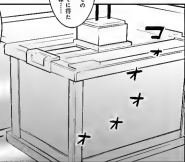
だけど

我が身まで
燃つてきたら……

倒してきた
相手を燃やそう

前に進まずには
いられない

このまま
溺れるわけには
いかないんだ



決戦戦：七龍洞龍



勝つことが
己の証明か

ふふん



余とこの
大型犬では
同じ剣士でも
格が違う



よく言った
奏者よ

余は至高の
芸術にして
麻波白野の剣



剣とは
何を切り伏せるべきか

その間に
フタをした騎士など
余の足元どころか
つま先にも及ばん！

おや
ださうですま、ガクエイン
何か脱獄したいことは
ありますか？

——いいえ、特にほ

ふん
聞きたいわい、
いるからでいいから

悪文：……
貴族は主の許可が
下りねば
何も開けぬのか？

いいえ
利く必要が
ないからです
赤き悪文よ

私の心は主に向けられたもの
ゆえにこの場で
私がもの思う
必要はありません

己の意思はない
というわけか

なんと凄かわしい

なんと凄かわしい！

ならば貴族は
常務する友を
斬れと命ぜられれば
その通りにすると
いうのか？

無論

おがむなら
私はいかなる機嫌にも
予を助めます

間違いが
あったとしたら
それは王ではなく
断剣を下された
友だと思えます

剣を預けるとは
そういうことです
上に間違いは
ありません

愚者だな
盲目のまま友を
斬るなどという
行為は美しくない

いかに
今晚を用いようと
余は断剣として
従わねだらう

しかしな
太陽の騎士よ

貴様のそれこそ
意味のない断剣ぞ

なぜです？

余の奏者^{ソニスタ}は
決してそのような
命を下さぬからだ

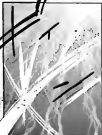


それは
剣の身勝手な妄想です
主の運命に自らの夢を
乗せることこそ不忠

恥を
知りなさい



ついに
始まった



だが
ガウエインの
「勇者の誇り」は
まだ破られていない

遠坂の癖は……

そろそろ決闘が
始まっているからね

よし
ここから









岸波さん



さあ、
ターゲットの位置は
既に知られている

お母さんの足は
動かない



おじいちゃん



お母さん
おじいちゃん
お父ちゃん
おばあちゃん



おじいちゃん
おばあちゃん





奏者

なに
かわからない
一撃が来る

おそいへん
宝具を
使ったのだ

一か八か

余の
「異能劇場」に
紹介入れる！

ダメだ

今の状況で
「異能劇場」の
紹介は不可能だ
……

ガウエインの
力を増くことが
できれば

あの宝具は
凌げない

沈まない
太陽などない



アリスは
絶句が
!?

太陽が
落ちた

「聖書の数字」が
壊れた……

ひとつ……つつたぞ……

その顔を見ると
攻撃を食らったのは
久しいと見える

良い気分だ

plamont 31
王者の資格



防護……
魔法の力で
壁を突破はできな
い

もう
一発も
動かない

うっ

あのハーウェイに
一発撃ただけでも
倒れたわ

しかも
どけきで倒れ
一撃



……あーあ……

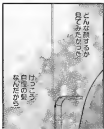
アイツに
倒せなかったの

この魔法系の
アバターじゃない
の？



こんな強さあるの
初めて見たわ

はっ、この
白煙の壁
なんだから





仕方ないか……



なぜなら——
貴様が主君と仰ぐ
そやつは完全では
ないからな

運命すぎるがゆえに
お前たちは
勝者になりえない



——さて、これまでは
勝者を譲ったが
無敵を譲るのには
ここまでのだ

無文である
そなたには
わからぬ話だ

そなたはまだ
完成していない

いや
永遠に完成できない

寂れだな
生半可な敗北では
そなたに備は
つけれまい

ゆえにそなたは
痛みを知らぬ
その精神はもはや
変革できぬのだ

僅にそなたの膝を
断るほどの敗北が
あるとすれば

それは――



口を潰め
バビロンの妖婦！

その先を
口にする貴族は
あなたにはない！



……中儀
結構なことよ

だが貴族は
さらに熱かしこ
う動揺してゐる

貴族が見るのは
「光輝を王の姿」のみ

王の威す諸政に
関心を持たぬなら
犬と何が変わるうか

今さら何を！
騎士とは
そういうものです

主君の前となって生き
主君の道とともに滅びる

そこに一切の
嫌疑も不潔も
あつてはならない



この身は
王の御前に
捧げたもの

己ある騎士など
それこそ戦れ

とわて

すべての騎士に
課せられるがよい！

威厳あるものとするのは
美しいが御前のまま
命を賭すのは
当然にすぎん

大団の騎士よ

主を助せぬ
正しきゆえ
貴族は道を
誤ったのだ

— だとしても

王を名乗りながら
人に仕えている貴女に
何がわかるというのです

余は元より
美に賛成した身

今さら誰に仕えようが
余が余であるのなら
問題などあるまい！

王を名乗りながら
人に仕えること
いのですか

貴女は！



そうだともし

虹は陽光を浴びてこそ
輝きを放つもの

無欠の工 無垢の剣よ
我が勇者の運命をもって
貴らの世界を知りたい！



……！



セイバー——
魔力を込めず！



……と……







カウマン
セイバーの予定は
変更す

発動の際を
狙いなさい



邪魔は



我が才を見よ！

万雷の喝采を聞け！

此處はトロ・ブリコンの
秘封魔術——



レオナルド・ピスタリオ・
ハーウェイが命じます

ガウエイン！

壁剣の最大出力ー
セイバーを
焼き尽くしなさい



これが
ガウエインの
真の力……

エリカの真力が
目覚めた……



俺の魔力を
すべて捨てる



セイバー



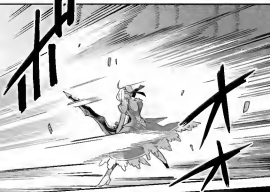
あの高みを
越えるんだ







エクスカリバー！
ガラディーン!!!







勇者の前に
立つ敵は

すべて
斬り捨てる



ガウエイン



今
図鑑を！

図鑑
の
おもしろさを

おもしろさを
おもしろさを



ああ

そとへ



これが……

敗北の
絶望……

奏者

勝利だ





そなたの道を
証明して見せたぞ



おめでとう

すべての願いを遂げ
あるいは救済し
勝ち残った
ただひとりの魔王様よ

聖杯戦争は――

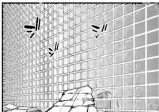
――今ここに終結した



高鳴の声……

月の中庭へ至る門を破ろう

熾天の玉座で聖杯が
君の答えを待っている



熱が冷めていくのは
怖いです

これが人の証の感情
「愛」なんですね……

こんな単純なことさえ
僕は知らなかった

敗北を認めた瞬間に
いえ、その瞬間を境に変わって

敗北した瞬間から
敗北した瞬間から
敗北した瞬間から

それは敗北ではない
それは敗北ではない

敗北を信じられない
と思ったことが
僕の境界だった

僕には
そんな当たり前の心が
なかったんですね……

今なら
兄さんのことも
理解できる

悔しき 悲しみ
死を迎えた悔み

そして
執事……

僕はそれらの感情を
本心の底で
埋めつけていなかった

僕は……

なんて愚かだ

そんな人間に
人々を導けるはずも
なかったというのに

ええ
わかっています

ガウエイン

ガウエイン

あなたは
知っていましたがそれ
裏の裏に在るために
知らないものが
何であるかを

貴が主？

——いえ
王よ私は……



この先は、何となく
あきらめることと
覚悟が必要だ
覚悟が必要だ覚悟が必要だ
覚悟が必要だ覚悟が必要だ

心を痛けて
涙に洗面を
尽くしてくれ

いつか僕が
敗れる時の
ために

その時が
来るまで
死なずに
僕のそばで
待っていて
くれたら

あまりに非合理的な
生き方ですが……
礼を言います 心から

あなたでなければ
僕はきっと
死にかけた

離流さん



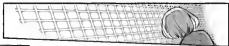
あなたは
本物の騎士です

この先に
何があるのか

僕の代わりに
見てきて下さい







私の王は貴方だけ

たとえ貴方の魂が
生まれ変わって
来世の人間になろうとも

私は
貴方を見つけ出して
仕えますよう

ありがとう
ガウエイン







Q...

白野さん...
こちらです

アッ!

桜!

今のうちに

私が管理している
階層の初期化は
まだ時間がかかるんです



外装は
ひどい怪獣ですが
肉体とのリンクは無事です

脳が焼かれる直前に
聖杯戦争の決闘がついたので
私も脱走を
助けることが出来ました

あんな無茶をして……

何って見過ごすのも
辛かったんですよ



遠坂！

君のおかげで
レオに勝つことが
出来た

ありがとう

ここもじきに
初戦化の渦に
飲み込まれます

彼女を連れて
早く！

ああ

大丈夫
自分で参る！

白野君

私も行くわ

あなたとセイバーが
行く先を
見てみたいもの

みんな
海の中に
沈むのか

初期化が
進んでる……

そうだ
この世界は
初期化され
予選会場の
状態に戻る

また
聖杯戦争を
始めるためにな

聖杯は……
ムーンセルは
なぜこの戦いを
繰り返すんだ？

最後のひときとなった
マスターには
その死を知る権利がある

君の知識の欠片を
壊めよう



ムーンセルの本質は観測機だ
コトはそれ以外の観測を
観念に留めている

神に成る力を祈しながら
自ら 全能であることを
否定している
だが

観測機である以上
避け得ない機嫌があった

ハイゼンベルグの
不確定性原理だ

観測者が観ることで
初めて事象は確定する
観ない物は 即ち確定しない

であるならば 見えない部分も
観なければならぬ

起こりえた可能性も
考慮しなくてはいけない



ムーンセルは
より完全な観測のため
多くの「コト」を
記録しなければならなかった

うゑに
再び奇蹟を与えて
対処させたのも
そのためののち――

対戦カードを組むのは
私の管轄外だ

その件に関しては
詳細は憶えられていない

繰り返すが
月に前らの
意思はない

黒洞窟に知能があつては
戦術の結果を
定めてしまうからな

だが 黒客のあの電が
ムーンセルを
掌握できたのなら

それは黒洞の副機関
「黒洞」にして
機能するだろう

ただその人間が
「強くある」こと
それだけが
燃料を手にするための
条件だった

この戦いは
その所有権を
定める試験

勝いの有無
勝いの価値など
どうでも
よかつたのだ

ああ
実がいい
今頃星雲のマスターよ

私はここで
他の人々とともに
終末を待とう

それがムーンさんの……
星杯の真意は
定めてはない

かみきと地上でいた
この神々の
元になつた人類者の
その精神は
遠くからかみき

あのっ

白野さん
私……貴さんのお手強いが
結果で勝つかうたです

初期化で
皆さんとの記憶も
消されてしまうのが
残念です

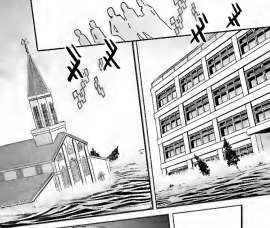
軽……

仕方……
ありませんね

僕は
ここであつたことは
忘れないよ

……軽のこと

どうか お元気で……



空井戦争が終わる……

本当に……

本当に？

また地上から
新たなスライマーを呼び出
す事が出来るんじゃないか

兄さんの言葉を
思い出して

……



僕は
聖杯に
関係ない……

4/4/...

area search.....



發行所

Stichting Streeklucht
Vrijheid 10
6708 JH Wageningen

● 2011年

問題 4 図 1 のように、質量 m の物体 A が、質量 M の物体 B と衝突する。衝突前の A の速度を v とし、衝突後の A の速度を V とする。衝突前後の運動エネルギーの差を ΔE とする。このとき、 ΔE の値を求めよ。

7127
 75-121440
 76-121440
 77-121440

セル

1997-1998

電話 03-3440-4444
FAX 03-3440-4445
E-MAIL info@yokoyama.co.jp

最初はそればかり
好きじゃなかったから
戻った

この事は
聞いてやるのだ
聞いてやるのだ
聞いてやるのだ



それは
それだけ
あの時分には
なかった



それは
それだけ
あの時分には
なかった

それは
それだけ
あの時分には
なかった



いつか
それは
それは
それは

ん

ん



……それくらい
よい戦いだっただ

人を愛するばかりで
愛されたことがない
私にとって
実に素晴らしい戦いだった

……うむ
人に愛られるというのは
よいものだな

この先に
何が待ち構えていても
そなたは
随することなく
戦やかにいてほしい

セイバーの感情だけで
不安を感じていたんだ
聞いてくれ

きいた

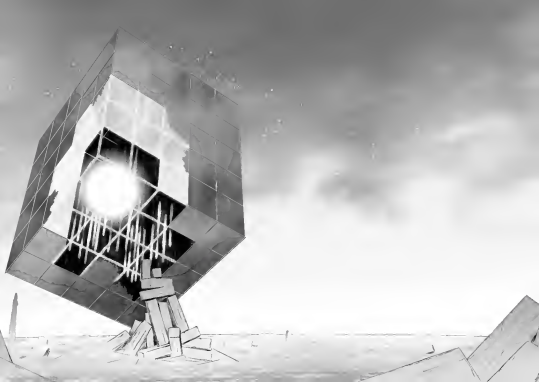
感情の感情は
どう……
出ているんだ

違もう

ああ！

約束するよ……
セイバー

悔しか出来ない
事をやり遂げに





聖杯戦争の真相



俺は

この男に

出会ったことがある



白衣の男……



七
七
七
七

様子の早とつでも
あてなかったが
あいにくここには
そんな機嫌はなくて



勝も抜いた聖堂は
ないだろうが
私からの拍手だけで
動悸してくれ



でも
これだけは言える

私は誰よりも
君を認め 君を愛し
君を誇りに思っている



君こそが
現たがも振り回された
聖杯戦争の中で

もっとも素晴らしい
マスターなのだ



知らない

母の墓に
参りまして、
お墓の前
に立って

あいつは
A-1なのかな

……心配がする
あの男
サイダントを
連れていくぞ

あやつ……

A-1ではない……

マスターだ！

あつ

何ですって？

私は戦争は経験して
いるマスターは
もう戦場だけの
はず……

この場所には
そぞろないマスター
——というの
は、
恐らくこそ
相応しいと思うがね

なぜ敗北した者が
生きてこの場にいるのか
知らなければならぬ
ならぬが……

うんしかし——
「あなたは何者か？」か

いい質問だ
その疑問には
答えておこう

確かに私は……だが
同時にマスターでもある

……いや
あつた、と
思うのが
より正確か



あつた……
つまり相手のから
マスタビーに
なつたつて……とか
そなたは……



ああ
正しい理解を得るには
説明が必要なようだね

悪いが少々
付き合つてもらふよ

自己紹介が遅れてしまったが
私の名はトワイヌ・H・ピースマン
トワイヌで結構だ



笑えない……
冗談だね

通称
知つているのか？

「アムネジア
シンドローム」という
病気の治療法を特異した
科学者

そして

トワイヌ・H・
ピースマンは
平然の表情ながらも
知つていふような
顔人よ

ええ

彼は30年前に
亡くなったのか

トワイヌは戦争を憎んで
人海戦跡に尽力した人物のはず

戦し合い
最終戦争なんて
真の先に達する人間よ

なのに
今の貴方はまだです

しかしそれはあくまで
表面の事実でね

私はそういうふうに
認識されているのか

戦争を憎む……
ああ、確かに
それは事実だね

私は戦争を憎んでいるし
決して許しはしない
それはハイウェイで
あろうと例外はない

このミリンヤルと同等のように
戦艦の一端が知れ渡り
それが真実と
認識されたいやうなものだ

そして

正確に言うと
私はトワイヌ・H・ギースマンの
記憶から生まれた
AIだ

生前の彼の本質を
知らせてもらおう

彼は病的なまでに戦争を嫌悪した

い今言ひ返すう
トヤイス一何のどミズヤトは
高閣に納家だった



黙々と置つてもいい
心臓が本意に
悲しいくらいに
運命に歯を返らせた



私は戦争の映像を
見かけるたびに
言いようのない
焦りに震われたんだ

私
私につける焦燥は
日に日に重くを
増て余すほどの
痛みとなった

科学者となってからも
私を戦場での
人命救助に向かわせたのは
そんな胸の痛みからだ

それだけなんだ
生野の私を
突き動かしたのは
正義感でも愛憎感でもない



ただ
疑問だけがあった

なぜ自分だけが
こんなにも
戦争を憎むのかと











それは都心で起きた
大規模なテロだった

うおおおおお





死に際に見た
焼け跡の光景

しかし
私にとっては
それ以上に
見たものではなかった

その時 生綱の私は
思い出したんだ
ずっと忘却していた
幼少の記憶を……



70年代
ある地方で起きた銃弾紛争
それは大団の
代理戦争だったが
私はそこで生まれた
戦火被災だった

思い出したそこは
地獄だった
あらゆるものが
あつけないく
腐れていった



価値も意味も
そんな重さに関係なく
あつかりと

命とは
本来そんなものだ
語るように

そして――
だからこそ聞いていた

生きていることは
それだけで奇跡なのだと
強い私は信じてしまった
のだあうね

その後
私は蘭子となり
過去を忘れ成長し
科学者となった

胸の裡に
湧きよるのを
命題を解いたままに

私は人一倍戦争を憎んだ
戦争そのものに憎意を持って
だからこそ科学者になろうとした

だが――
その裡にあったものは
否定ではない
否定ではなかったんだ

をせなら

私は戦争を憎むために
現地に赴き
そこで多くの犠牲を
見すつけられたからだ

戦後の新時代と
物資を持つ敵に
武器を奪われながら
それを駆逐して
帰還した新兵のチーム

戦後最悪の
運命を辿るジャングルに
ゲリラの襲撃から
逃れようとする兵隊
はすかさず敵で戦場を
覆いしめる敵の少女

正敵となった村を
文明の手を借りずに
何十年とかけて
復興した戦後の人々

……早えは
生前の私もそうだ
私の健康は
すべて戦争によって
生まれたものだ

多くの犠牲
多くの戦死
それはあの地獄続きには
なしえない



3秒後に心停止する状況で
私はようやく
自分の脳内に断片を得た

否定ではなかったんだ
私があれほど
戦争を知りありと
何度も地獄に
足を運んだのは私が……

私という犠牲者が何より
あの行為のすべてを
過ちだと
否定しきれなかった
からなのだ

ムーシヤルはすべてを隠す
すべてを記録する
死に願の私の想いも
また記録された



そして時が経ち

私はその経験と共に
この世界で何者かとして
生み出され、力
上にある大物の
部下の一人として同じ道に

彼らは人間らしい
感情も見ず、
結局は与えられた
役割をこなす人間に
すぎない

私もそうだった

しかし――

ある時
貴族達を招待した……

そうだな？

ああ

理由はわからない
何者かとしてあまりにも
多くのマスタールを倒壊して
罰せられたのか

貴子ハツキの
才能を誇っていた
せいかな

あるいは誰なる貴族
側にも増して
わずかな確率で
誕生した貴族なのか

それを知る術を
私は持たない

しかし商業団に買収された以上
私はトワイヌ・バースマンとして
行動するしかない

生前の私が夢に見た夢
形にすることもなかった理想
それを実現するために
私は行動に移った

それは
マスターとなり

異国の身から
生存競争の頂点に
立つという挑戦

私はNPCだからね
君たちと違って
死んでも次がある

こうして
幾度となく
戦いを繰り返して

私は
強くなっていった

先々、魔界戦争と称
ムーンセルの
侵略戦争活動の
ひとつに過ぎない
わらん魔界戦争など
という名もなかった

ムーンセルは太古
魔界のサングラムを
必勝としたけれど
生存競争は惨劇を繰り
トライアルに
すぎなかった

だが、今まで魔術師は
自己解放の末、
ともに戦い合い
脱落していった

戦いものだろうか？
私が勝利するまで
この世界は魔の山で
埋まっていたんだ

こんな戦いでば
私の願いは
叶えられない

私はここから
書庫のルールを操作し
現在の魔界戦争を
作り上げた

ただひとりの勝者だけが
生き残る苛烈な生存競争

想像もできぬ域まで
人を押し上げる
可能性の域に
送り戻したんだ

そして
君が現れた

本家の開始時には
鳴りやみに
最前線へスカーで
あがることが
ついに世界真の王の
側近に選ばれる

その願いは
今や確信に変わった

トワイ

君の存在こそが
それを証明して
くれたのだから

お前の願いは……
本家の真の願いとは
何だ？

むろん——戦争だ

人類すべてに
等しく
同じスカーで
戦い合いをしちゃう

この未来は
間違っている

1960年までは
まだ成長期だった

それがムーンセルの脱獄した
人類を食糧として紡織だ

消費と繁栄の
バランスは取れていた

だがその後に来るで
あろう成熟期

人類を育てる段階で
食糧の消費は増えるからムーンセル
が食糧だ

まるでなかったんだ

わかるだろう？

収縮がまるで
合っていないんだ
この星は

停滞した精神
狭小路の世界
腐敗した果実
そのものだ

そんな歴史は
間違っていると
思わないか

人類の成長に
もっとも効率の良い
前進のために
私は戦争を選ぶ

今まで気づけていたものに
相応しい未来を
築き上げなければ
人類はただの輪廻者だ

くっ……

白野君

嬉しいけど……
アイツの言うことは
完全に否定できない

私が西沢財閥に
反逆していたのも
同じ理由……

世界の命運を止めるため

ただ
その選択は
私には
できなかった

ああ
君では
できない

できるわけがない

君にはそんな覚悟は
ないからね

私の思想を
引き継ぐ者として
相応しくない

岸波白野

君は名もない
一般人でありながら
ついには世界の命運を握る
代価にまで成長した

そう
戦いが君を鍛えた
覚悟がその血肉を
顔に刻んだ

それは人類に
可能性を
示すものだ

ああ 勝利に接近したまん

君には地上に
その成長過程を
知らしめる権利がある

Ph

ミーンセルの持つすべての情報も
その未来予知にも等しい情報機能があれば
確実に全人類規模の戦争を起させる

隠滅するためのものではない
正しく行動すれば誰もが必要される
生存のための戦争が

そして
声高らかに
叫んでほしい

「戦いは必要だ」と
「人類はより早く
進化できるのだ」と

君はただ一言
ミーンセルに
入力すればいいんだ

止まるな」と

その後は
好きにすればいい
神になるのも
王になるのも君の自由だ

私はそれを
祝福しよう

同であれ
僕の決断は
戦いに傾斜する
だろうからな

君の回答は何だい

戦いを肯定しろと……
戦争そのものを憎みながら
戦争が生み出した破壊を
否定してはならない

戦は国境を越え、
戦う者も被害者となる。
たとえ戦った側を助けても、
被害者となるのは避けられない

しかし――





正規のマスター
じゃない者は
分断……



それでは意味がない
私には正規の師者が
必要だった
私の理想を体現し
世界へと変れる者が

だからここに留まり続けた
中国にいたる門の跡で
長い年月
私以上の戦いの華しさを
得も続けた

さあ
君の回答を
放てくれ



戦いに意味が
あるのだとしても

それが人間の進歩に
必要なのだとしても

……やはり俺には
戦争は肯定できない

必要悪という
言葉も知っている
けれど
理屈じゃないんだ

先程まで話していた相手は
今は世界のどこにも存在しない
その声も 姿も 意識も 願ひも
二度と通らない

聖杯戦争の間に
何度も味わった
その喪失感と痛み

戦争を肯定するには
それだけで十分だ

お前の目的を
果たすのは断る！

……
それが
君の選択なのか

……理解に苦しむよ
他の人間ならともかく
私の理想の体現者である
君がね

……しかし
君の意図を測つほど
私も余裕がある
わけではない

君ほどの流材が
現れる偏証
またない

君を捕まえて
洗脳するか……

私も
手に入れた力を
行使するしかない

トワイヌは
ひみつだけは聞きたい
ずつと持ち続けたと言ったな

商標に
作り変えられた
聖杯戦争で

我々より先に
到達した者たち……
今までの勝者は
どうなったのだ？





彼らは私の考えを
理解できなかった

おそらくは、簡単に
勝ちすぎたのだろう
私と同じ理想を
見られる人物では
なかった



——そうか
貴族は戦争に参戦ではなく
戦場で戦ってきたのだな



ゆえに

処分させて
もらったよ



我が直感を確とするには
そのひと前のみで十分だ



そうか……



全を失くすために
償に救いをもたらすために
私はこの力を渡かった

人類にとって私は愚である
だが生命とは転輪するもの

見えない凡庸のサーヴァントと
エーレンがその運命を
私に与えた救いの使者……



来たれ 救世の英雄！
この世でただひとり
生の誓しよりも解脱した被害者……



Saver





この表層……
規格外過ぎる……

体が……
動かない……



ダメだ
君はもう
これ以上戦えない

魔力消耗も
減耗甚甚なんだろ……



遠坂
ここで
待っていて
くれないか？

私も戦うわ



やっと
君に

借りが
返せようなんだ

君はまだ
生きている
人間だから

地上に
帰らなきゃ

大丈夫

全部終わらせて
戻るから

白野君……
あなた
まさか……

これが
最後なの？

セイバー
行くぞー



バカ……



奏者！

相手は
人類をも暗殺した
悪魔だ

何か術はあるか？

ある！

トワイヌは
僕の体が目的だ

少なくとも
僕の近くで戦えば
広範囲を破壊するような
攻撃はしてこないはず

二人とも
絡め取られたら
どうする？

そんな
へまは
しないだろう

セイバー

君となら
きっと
出来るよ

無論だ





CODE:
CAST

gain_str!

さすが
湯池の中で
成長した
魔素師だ

7500

よくぞここまで
サーヴァントの能力を
練り上げたものだ

12000

9800

あの世界の王すら
倒したのも
納得できる

だが
私のサーヴァントとは
次元が違う

違うんだよ……

サーヴァントの
存在を
消滅させることが
可能なんだ

転生還るに



タイムリミットだ

5670000000

勇者

最後まで

この手を
離さないでくれ

ハクノ……

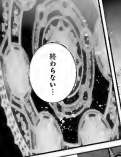
わたしは

そなたのそばにいるぞ





君の愛しい刻は
消滅した



終わらない……



まだ



まだ……

俺の命は
消えてない



岸波白野の名に
おいて命する！



セイバー！

俺の魔力を代償に
顕現しろ！



それが君の
運命か

やめたまえ

運命ひもじ
顕現させるのに
どれだけの魔力がかかる
思っている？

魔術師ひとりの
命では釣り合わない

それ以上の
魔力の出力は
脳が焼き切れるぞ

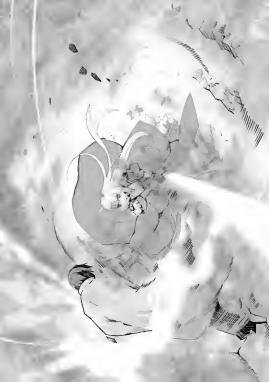


それでも
構わない！

全部持って行け

セイバー――！







人の限界を越えての
魔力解放

ああ

最初から
お前の目的は

僕も
お前と同じ存在

君の正体は
まさか……

データしか
存在しない
イレギュラーだ

叶うことは
なかったんだ……

そうか

行き先とところは
同じ国境が

命あるものは必ず滅びる
衆生は苦しみの中絶えにいる

自分の働きをもって
昔々への道を
拓こうとした彼もまた
心に罪を犯している

道はひとつではない

人の善悪に
価値がないように
人の意識では
世界の有り方は
変わらない

覚者あるいは救世者

地上でただひとり
生命の真意に迫り着いた者の
人間ではないのか
生の苦しみや死の絶望を有したもの

血塗られた戦いの末よ
涅槃にて共に善の末を見届けましょう
それが貴方の 疑問の救いだ

……そうか
彼はトウイスの思想に
力を感じたのではない
トウイスはトウイスさんで
人間の心の行く末に
その意味を感じていたのだ

……
よかった

最後の命魂を使ってし
まだ聖杯に勝つ事も勝利は
残っているみたいだ

聖杯戦争は
すでに終結して
いるからな

トワイスの作った
戦争への火種を
消し去ろう

殺し殺され
多くの命が流れていく
聖杯戦争を終わらせる

ムーンセル、オートマイン
神の御機嫌
この世界を
フリーダムマックスが
救うために戦うべきだ
と信じている

そっ……

今度こそ勝つぞ
神の御機嫌を
満たさなきゃ



……が……

……の中……

すべて
ひとつになうて
溶けていく感覚だ

思っていたより
あまひ
作人なごめ

神様は……
……
生み出されたんだ

当然か

……
よし

完全に
分離される前に
思いきり入力しないと――

なごめが
……

おかしな感じがする

「あれが……」
遠坂凛の瞳が赤く光る

この間に入力する
瞬間はあるか……

厳しいな

踏み……
もう少し
待ってくれ

助けが
必要か？

ゴッゴッ



セイバー……

こんなところに来て
しまったのか



わたしという
不純物が混じれば
解析の時間がかかり
そなたの分解まで
時間が
経てるだろう？





遠坂——彼によろしく



……うむ よしやうた
それでこそ
貴の世に送んだ
わたしだけのマスターだ



貴様は
すべてを記憶し
すべてを
両断する力がある

そなたにとって
それが
正しい結果か

あるいは
正しい結果になるか
わかりぬが

おれは死んで
おれのおれは死んで
おれのおれは死んで
おれのおれは死んで



そのときは
必ず……

フッ



けい...

けい...



生きて...あ...

ソレ...



白野君からのメール？

何このデーター...

冷凍倉庫中の岸波白野がまだ存在していたって.....

アシタ
本当は生きて——



うん 聞いて.....

これはお前さんのモデルになった人物に過ぎない.....

君の中にある
愛憎がそのモデルになった



でも.....
これがお前さんの本心
同じ心さ——
君の力を手を使った

そのか……同じ現代を
一緒に生きているんだ

いいわ
あいつらぼんぼんは
性に貪りなないし
こころなつたら
なんとしてでも
隠し通してあげようじゃない



約束するわ
きつとまた
あなたに会いに行く

見知らぬ未来は 彼の世にどう映るだろうか？
かつての日常も 高き上げた過去も 常識的なものになっている

——なんだ
その程度なら なんとでもなる
失われたものへの追憶があるけれど
なに 地球がなくなったわけでもない
道があるのなら 日分はきっと歩いていける

現在には変えて行こうとする人々がいて
大切に思える人がいる

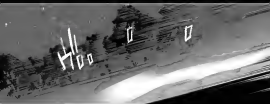
一緒に同じ時を生きていくことが出来る
一緒に進んでいくことが出来る

ああ——それはなんて待ち遠しい
希望に満ちた——





EXTRA-STAGE











ここは……
月達原学園……

笑……
分解されたんじゃない……

まったく

そなたとばかり



夢をなしに
ムーンセラムを
解体しようとするから
こんな道徳りに
なったのだぞ！

セイバー……

これは

夢じゃないよな……

久しいな
奏者

まったく
そなたは
何世紀経っても
変わらぬままだ

あれから

8月A.P.Hは
自刃を遂げた

外果の魔術師は
人間にもとまらぬうなり
これは悪い魔術となつた

何世紀……

そんなに
時が経って
しまったのか

魔術戦争は
再戦を誘ひ合ふ場と
なつたのだ

この度で
長い旅を
閉じて見よう

何世紀のあつたが
顔を上げて見よう

再びあつた
旅のあつたが
顔を上げて見よう

ぐずぐずしてる
場合ではないぞ！

では行くぞ
我が手を返るがよい！

行くぞ……
このまま……

新参者を蹴めろものは
王者の旗め
言うまでもなく
そなたも余の
出陣であらう！

余たちを苦しめて
新しい覇権戦争などとは
遠まじくけしやあらう！

セイバー……
待たせて
ごめん

——これが古いS.E.R.A.P.H.での最後の記憶

白野が収めた勝利に対する最大の報酬だ

——あまりの幸福に目蓋を閉じたが
今度こそ、失われるものは何もない

目を開くと
ほしかったものは未来に広がっている
もう、この夢が欠けることはないだろう——

ending or future?



あの丘を歩いたら
どんな景色が広がっているのだろう..

私も巨野君と同じく
表セイバーに呼ば羽が来て
ここまで送り着く事が出来ました

フェイト/エクストラのコミカライズは
私の初めての漫画連載です

大幹ぎなシーンが多すぎて
ずっと描き続けていた3年半の経験は
自分にとっても特別なものになりました

監督を頂いた京坂さんのご縁
機会を下さった武内敬城
そしてこの連載に関わった
全ての方々に感謝です

描きたいものを描かせて頂いて
有難うございます！

また次の作品で
楽しんでもいただけるよう
頑張ります

ろびな





BOOK★WALKER